

目次

天理大学附属天理図書館蔵『於雲沢蒙求聞書』	柳田 征司	一
サ変動詞未然形「さ」の成立過程	山田 潔	三五
副詞「かま(構)ひて」は「かま(構)へて」の音転か	坂詰 力治	四〇
狂言の言葉「おふふ」について	鈴木 博	五〇
和泉流狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較	小林 賢次	五三
——せりふに関して——		
狂言の心話文	阿部 八郎	五七
「ぶた」の誕生	鈴木 英夫	一一三
国語史的注釈試論『大かづさまぐんき』		
へ天正十九年鷹狩り・関白秀次聚楽渡御	小林 千草	一三
伝書としての女中ことば集	松井 利彦	一四

へら抜き言葉〉私見……………	杉本つとむ……………一八五
——古代語から近代語への脱皮——	
武士の公用社交用語……………	田中 章夫……………二〇三
「しか」のない文……………	中野 伸彦……………二二三
『二之富當眼』の仮名遣い……………	矢野 準……………二二三
——「は・わ」「お・ほ・を」を中心に——	
近世後期上方語資料としての『鳩翁道話』について……………	山口 豊……………二四二
近世江戸語におけるラシイについて……………	岡部 嘉幸……………二五五
江戸・明治初期における可能を表す「得」の用法……………	斎藤 文俊……………二七五
英学会話書『英和日用句集』の人称代名詞……………	常盤 智子……………二九一
——『南山俗語考』・『英和日用句集（初版）』・『同（三版）』の比較から——	
『英和通信』初篇諸本について……………	大久保恵子……………三〇九
江戸語から東京語に至る断定辞としての終助詞「よ」	
の変遷——断定辞としての終助詞「さ」との比較から——……………	長崎 靖子……………三一九
明治10～11年の新聞のことば……………	進藤 咲子……………三五五
——「郵便報知新聞」を資料として——	
汎共通語……………	森岡 健二……………三七三
全国共通語「おる」の機能とその起源……………	金水 敏……………三九三
鉄道駅名の形成と変化……………	鏡味 明克……………四二三
「かけめぐる」ゆめ……………	岩下 裕一……………四三九
格助詞ガ・ノの用法から見た俳諧表現史の構想……………	神戸 和昭……………四四五
——芭蕉・蕪村・一茶の発句をめぐって——	
四母音「三宅島坪田方言」事実の検証……………	山口 幸洋……………四六五
論説文の口語化……………	宮島 達夫……………五二二
執筆者略歴……………	五三

五 底本において、漢字にもともと振り仮名のある場合には、へんで示す。
六 仮名遣いは、底本のままとし、今日の常識と大きく異なる場合には、「私注」において言及を行なう。
七 濁点は、適宜新たに伏したが、一々断らず、問題になりそうなものについてののみ、「私注」において言及を行なう。

八 反復記号の部分に漢字を当てる場合、漢字一字分の反復については現在の慣例に従い「々」を使う。

九 読みやすさを考慮して、新たに句読点を加える。改行や意図のある空白部については、できるだけ、底本である太田牛一自筆本のリズムを伝えるように努める。

十 誤字・宛字・衍字などは、(マ、)と一旦示し、「私注」において言及を行なう。

「私注」については、国語史的観点からの言及や文章心理学的な分析を最優先し、同じく太田牛一の著作になる『信長記』（岡山大学付属図書館池田文庫蔵・『信長公記』（陽明文庫蔵）などとの語彙的・表現的類似にも留意してゆきたい。また、記された内容一つ一つを「情報」と見て、個人における「情報」の文章化と表現の実態を追うという視野をも有するものである。

なお、歴史上の人物については、『国史大辞典』（吉川弘文館）『戦国人名事典』（新人物往来社）などを、地名については『日本歴史地名大系』（平凡社）を参照することにして、それぞれ、印を付した略号を用いる。

釈文「本文七」

天正十九^{辛卯}、十月はじめより尾州^{びしゅう}、三州御鷹^{しゅうたか}つかはされ、十二月まで三か月、御鷹余多^{たかあまた}にて御鳥

数大小三千に及ぶ也。

おびた、しき物数^{かず}、往古^{わふこ}より承^{うけたまは}り及ばず。十二月十六日、大津^{しづ}の城、

新庄駿河^{しんじょうするが}、所にて御用意^{ようい}なされ、思^{おもひ}く様^{さま}くひようげたる御出立^{いでた}ち、御鷹匠衆^{たかせうしゅ}、百五十余人^{よにん}、

薨^{いらか}を並べ、四十八鷹^{たか}の事、申^{まを}に及ばず、諸鳥^{しよちよう}を御据^すゑなされ、道^{みち}は一筋^{すぢ}に候へども、中をあけて、

左右に御鳥飼^{とりかひ}の御餌^ゑから一様に結構^{けつこう}に立^たせ、持たせられ、中筋^{すぢ}は、御警固^{けいこ}の御衆^{しゅ}也。

関白秀吉^{くわんぱくひでよしこう}、御乗物^{のり}に召^めされ、これも御鷹据^{たかす}ゑさせられ、大津より京へ三里ひきつゞき、金銀^{きんぐ}を散

りばめ、光輝^{ひかりか}き、結構興^{けつこうきよう}を催^{もよほ}す有様^{ありさま}、筆^{ふで}にもことばにも申^{まを}しがたし。

内裏^{だいり}の南より西へ回り、聚楽^{じゅらく}へ直に御通り候^{をさふらふ}也。これによつて、御築地^{ついで}の上に皇居^{くわうきよ}を構^{かま}へ、月卿^{げつけい}

雲客^{うんかく}、公卿^{くけい}天上人^{てんじやうびし}、異香^{いきやう}あたりをはらつて、四方^{よも}に薫^{くん}じ、帝^{みかど}も御覧^{みらん}有^{あつ}て、面白^{おもしろ}く思^{おも}ひ召^めし、御

歡喜^{くわんぎ}斜^ならず、見物^{けんぶつ}おびた、しき次第^{しだい}也。

私注一 鳥数・物数・ひようげたる・四十八鷹

天正十九年^{辛卯}（二五九二）十月初めより十二月まで三ヶ月間、豊臣秀吉は、尾州（尾張国）や三州（三河国）で、鷹狩りの旅を挙行した。

その鷹狩りに使った鷹の数が多く、「御とりかず」——鷹の捕獲した獲物（必ずしも鳥には限らず、小動物を含む）